

夏期福音特別集会（御殿場）（3）

エホバの僕

――イザヤ書第42、43、44章――

1990年8月11日

小池辰雄

穢土即極楽 詩「日本キリスト各召団に寄す」 詩「失明と十字架」 エホバの僕の歌 キリストは大宇宙的な存在 永遠に女性なるもの しばしの別れの言葉 汝は我が有なり 贖ったから帰って来なさい 祈入により霊気は入って来る 有りて在らしめる者 良寛さん 毎日が一對一の集会 グノーという作曲家 夏期福音特別集会は35回で止めた

【イザヤ42】（一部私訳）

1 見よ、我が支持するわが僕を、わが魂の喜ぶわが撰び人を。我はわが霊を彼に与えた。彼は諸々の国民に公義を齎す。2 彼は叫ばず、言挙げせず、その声を巷に聞こえしめない。3 傷める章を折らず、ほの暗き蠟燭を消さない。信実を以て公義を示す。4 彼は衰えず挫けないで公義を地に据えつける。津々浦々はその教法を待ち望もう。（私訳）

5 天をつくりてこれをのべ、地とそのうえの産物とをひらき、そのうえの民に息をあたえ、その中をあゆむものに霊をあたえたもう神エホバかく言い給う。6 云く、われエホバ義をもてなんじを召したり。われなんじの手をとり汝をまもり、なんじを民の契約とし、異邦人のひかりとなし。7 而して瞽の目を開き、俘囚を獄よりいだし暗にすめるものを檻のうちより出ださしめん。8 「われはエホバなり。是わが名なり……」

【イザヤ43】（私訳）

1 ヤコブよ、汝を創造したエホバ、今こう言い給う、イスラエルよ、汝を造った者今こう言い給う、……

25 我こそは我自らの故に汝の不義を消し、汝の罪を心に留めない。

【イザヤ44】（私訳）

21 汝はわが僕。イスラエルよ、我は汝を忘れない。22 我は汝の不義を雲の如くに消し、汝の罪を霧の如く散らした。汝われに回帰せよ、我れが汝を贖ったのだから。



●穢土即極楽

今晚は、よくいらつしやいました。昨日は、ものすごい台風で、あれはしかし、恵みの雨であつたので、いろいろ皆さん、大変でしたけれども。そこで、私は今日は号に「天風」と書いた。「風」は、ご承知のとおり、「霊」と同じ字です。これは、ヘブライ語もギリシヤ語もみんな同じです。そういう意味において、あの台風が吹いてきたら、ああ素晴らしいなあ、と。「困ったなあ」でなくて、「素晴らしいなあ」と。自分が風となる、雨となる。

私は今度、伝道五十周年の講演会をしますけれども、実は、「講演」じゃない、「大告白」なんです。まあ、驚くでしょう、おそらく。キリスト教界で未だかつて言われないような事を言いますから。それはもう、あそこでぶつ倒れてもいい。そういう講演会を東京と京都でいたします。

今日は、パウロをやるうと思つたが、パウロの大先輩がイザヤなんです。そこで、やはり私はイザヤをやりたくなつて、昨日、急にイザヤに変えてしまつた。もし、旧約聖書からただ一卷を取り出すというならば、「詩篇」ではない。ルターは、詩篇と言いましたが、私は、イザヤ書。これはもう、全聖書がこの中に入っている。大変なところです。

24時間の十分の一は、聖書を読みなさい。これは、身体からだで読む。読むことが、直ちに祈りである。そういう読み方をしなければ、ダメなんです。読んでから祈るのではない。読即祈なんです。そういう読み方をしなければ、聖書は、本当は読んでいるのではない。

「自分じゃない、自分のことを何だかんだと何を言ってるか」

と。しかし、自分をなくそうとしたら、苦しむ。これは、禪宗的な言葉でいうと、

「穢土即極楽」

ということ。穢土えどが即極楽、天国というのが、キリストがくださった世界なんです。我々自身は穢土だけでも、それが即極楽である。穢土は穢土でいい、しかし、そこに本当の極楽があるんだぞと。これが体感、体現されてきたら、本ものです。みんな、この「即」の世界です。

「罪の深きところにいよいよ恵みがいや増す」

とパウロが言つたが、正にそうです。地獄が同時に天国です。地獄をなくそうとしたつて、ダメなんです。そんなものは、神さまが消してくださいさる。

牧師さんたちが驚くんですよ、私の話を聞いて。実は、こないだ8月1日に野尻で市民に一席やつてくれということになつて、お話した。市民の誰でもやつて来ました。「文化と宗教」という題。大体、宗教というものを本当はみんな知らない。本当の宗教とは何か、ということを中心にして語りましたら、本当にみんなびっくりしてたね。感動して、終わりには言葉がない。そういうものです。我々はどこに行つても、本当のことを告白することができるから、何も恐いものないから、ありがたい。

人間小池はしょうがない野郎ですよ、これは。いいですよ、どうだつて。私を問題にし



ているならば、あなた方はダメになるよ。立派な牧師さんでも、先生でも、伝道者でも、何でもないんだ。私はゴミみたいな奴なんだ。しかし、

「ミミの中に三千のお教がある」

と、道元が言った。そのような世界を、私はキリストからいただいている。皆さんも、召団の各員は、そういうんですよ。

●詩「日本キリスト各召団に寄す」

私は、こつちへ来る少し前に、8月5日に、十二の召団の特質をたった2行ずつに書いた。それを、「聞けよやひびく」のあの譜で歌えるんです。まず、北から南へ。

召団讃歌B 21「日本キリスト各召団に寄す」

――聖書伝道五十年の峠にて――

（1990年8月5日作 讃美歌169「聞けよやひびく」の曲で）

- | | | |
|----|-----------------------|-------------------------|
| 1 | み霊の翼 | うち張り翔ける |
| 2 | 伝道の旅人
公文の教育 | 北斗の召団
聖書の智慧の |
| 3 | 建築の業 | 日光の召団
隅の首石 |
| 4 | キリストなるぞ | 川口召団 |
| 5 | 教育の業 | 地道になして |
| 6 | 福音するは | 浅間の召団 |
| 7 | 霊峯仰ぎ
愛の証示の
比叡の麓 | 弱者を助く
白隠召団
学問の子らに |
| 8 | 主の愛流す
光明皇后の | 加茂川召団
慈悲の心を |
| 9 | 主に在りて生く | 三笠の召団 |
| 10 | 巴現塾の | 源泉何ぞ |
| 11 | み霊の力 | 浪花の召団 |
| 12 | 七宝の美術 | 創作無限 |
| 13 | 福音の光 | 玫瑰の召団 |
| 14 | 農事はいのち | 主の心なり |
| 15 | 種子時きをなす | 讃岐の召団 |
| 16 | 聖書の写本 | 全うしたる |
| 17 | 天剣の人 | 長島召団 |



12 五三、三五の イザヤの預言
 そのキリストの 武蔵野召団
 13 エン・クリストの 旗幟あきらけき
 十二の召団 ハレルヤ・アーメン
 こういう歌です。これが13節になっている。

●詩「失明と十字架」

次は私の個人的な告白ですから、これも、聞いていただこうかな。

召団讃歌B22「失明と十字架」

――聖書伝道五十年記念日を迎えて――（この詩歌は愚生が独吟すべきもの）

（1990年9月22日作 讃美歌404「山路越えて」、讃美歌319「わすらわしき世を」の曲で）

1 大正の世に兄と我れは

同心町にて 共に暮らす

2 兄はいつも 主にひたすら

3 従いまつりて 雄々しかりし

噫北京は 彼の任地

4 正に火の如く 燃えて在りし

サタンの業 彼れは知れど

十字架を負いて 彼れは去りぬ

5 父亡きあと 母は多年

我々のために 労苦せしぞ

6 母は今や 兄を亡くす

その悲歎は いかばかりか！

7 遺骨抱き 母は海上に

失明したるぞ 何たる無情！

8 兄き十字架 母の失明

實にわが生涯は 弔戦なり

9 聖書伝道 町に山に

五十年峠の 秋のこの日！

10 受けし恩寵 想ひ返し

み前に平伏し 独り落涙

11 主キリストは 我れを愛し

み霊の力を 与え給う

12 世は棄つれど 君は棄てず



悲願を必ず 遂げさせ給う

13 預言者・使徒！ 我れも燃えて

炎の告白 詩とならん

14 聖名に在りて 神のドラマ

生涯の限りを 詠い尽くさん

これは、「わづらわしき世を」という、あの静かな譜で歌います。

●エホバの僕の歌

それでは、イザヤ書に入ります。イザヤ書の講義を、別にするわけではありません。42章の「エホバの僕」の歌。この「エホバの僕」の詩は四つあるんですが、42章の1節から4節までが第一の「エホバの僕」の歌。私は9節までを「僕の歌」としてもいいと思っいるくらいですけれども。

「見よ、我が支持するわが僕を、わが魂の喜ぶわが撰び人を。我はわが霊を

彼に与えた。彼は諸々の国民に公義を齎す。」（イザヤ42・1 私訳）

「見よ」と、ヘブライ語では、一番先に「見よ」が来ているんです。この「我が僕」は、勿論、イスラエル全体を「我が僕」ということもありますし、イスラエルのある部分の人たちを「わが僕」ということもありますし、或る個人ということもあります。三段になるんです。そのような、「我々」と「我」と、みんな、「僕」という言葉で言っている。要するに、「僕」は神さまによって動かされている。

その最たる特別な方がイエス・キリスト。だから、キリストへの預言であるわけです。キリストはイザヤ書を本当に愛読された。そして、これは自分への預言ということをはつきり受けとられた。その通りに彼は行動され、十字架に懸かり、甦った。全部これは、イザヤの預言の通りです。

「見よ、我が支持するわが僕」

と、こういうように神さまから、二人称で呼びかけられた時に、これは勿論、キリストですけれども、我々はこれを読む時に、すぐ神から自分への言として受けとる。

けれども、

「私はとてもそんなものではありません」

というでしょう。とてもそんな者でない者を、そのようにして呼ぶのが、神のものすごい恵みの力なんです。いいですか。資格のない者を資格つけて動かすんです、神さまは、無を。私たちはしょうがない無力な奴だ。無力な奴に力を与えて、無限の力を与えてゆく。それを実証したのが、キリスト・イエスですから。我々は、そのキリストの現実を自分でもつてマネすることはできない。マネしないで、その現実を開いているのが、いつも申し上げている、この「十字架と聖霊」なんです。



「聖書が分かるの分からないの、先生がどうのこうの、自分がどうのこうの、あの人がどうのこうの」

と、そういうことではない。そういう、対キリストと一人称の、対一のこの現場。その現場を持つたらもう、ぶつ倒されて、そしてそこにもすごい力が来るから。本当だから。そうでしょ。それを体験するまでは、実はこのキリスト召団の団員でないとまで言いたいくらいです、正直。それくらいの、あなた方は、我々は選びの召団なんです。こっち側がどうだからではない。それを受けとったら、本当に驚くべきことが、一人びとりにその人その人らしく展開していく。

私がここに来た時に、Yさんが指がおかしいというから、

「来なさい、祈ってあげるから」

と。それで、私は祈りながら按手した。もう楽になられたでしょう。そういう現実なんです、我々の現実。破れ器みたいな私を使い給うんだ、神さまは。だから、どうぞ、皆さんはその生活において、自分で体験し体現しなければ。福音だの何のかんのことではない。

●キリストは大宇宙的な存在

私は、今度の9月29日の講演では、東西を融合するような話をします。宗教の世界を。キリスト教も仏教も、全部融合するような話をします。何も、キリスト教と仏教に限らない。およそ、インチキでない宗教は全部融合してしまう。そんな話は、恐らく、未だかつてないでしょう。それは、キリストがもの凄いからできるんです。お釈迦さんがどんなに偉くても、それはキリストとは桁が違う。キリストは大宇宙的な存在なんだから。私は、むしろ、いろんな人に来てもらいたい。特に宗教界の人が来てもらいたい。それはもう、棄身で話しますから。私は仏教のことは何も詳しくありませんよ。けれども、その本質はちゃんと掴めている。道元を読めば、道元になるし、親鸞を読めば、親鸞になれるし、空海を読めば空海に。どれでも本当につかめるのは、キリストの光を持っているから。本当ですよ、これは。だから、全部を総括できるんです。もの凄いです、これは。もう分け隔ては一つも要らん。

「直き者にも直からざる者にも雨を降らせ、

義しき者にも義しからざる者にも陽を照らす」

という、そういうキリストの言は最高の言です。そのような人物が、日本には出て来ない。これは、教育の根底に本当の意味における宗教がないから。仏教なら仏教でいいよ、本ものになってくれと。あんな素晴らしい、超一流の坊さん達をだした、先輩がいるのに、仏教は何しているかと言いたいくらだ。日本の仏教界で輩出した、あの一流の七人八人の坊さん達、それに匹敵するものが、まだキリスト教界にはいないよ、あれだけの人物は。内村鑑三だつてまだ手前手前、まだ低い低い。賀川豊彦がかなり近いけれども、まだ低い。



アッシジのフランシスコくらいになると、違うねこれは。マルチン・ルターも、カルビンも、まだちょっと足りない。勿論、彼ら一人びとりの業績は、私は尊敬しますよ。けれども、聖書の預言者たち使徒達の、この次元は凄い次元だから。私たちが、いくら小さくても、同次元になれるんです。最も深いもの、最も高いもの、最も素晴らしいものは、無条件で来る世界です。

どうぞ、皆さんは、そのようなはりのある福音を――裾野一つは、京都一つは、岡山一つは、全部を背負ってますと、言うくらいの気持でやってください。それは、キリストが背負わせる。一番大事なのは、本当にその召団の一人びとりです。

「孤軍万軍」

という言葉は私は作ったけれども、正に、孤軍万軍なんです。

●永遠に女性なるもの

女の方は、弱い方だけれども、大事な使命を持っているんですよ。私は、母の写真はいつも私の上衣の内隠しの中に入っている。今でもそうです。ゲートルが『ファウスト』の一番後で、

"Das Ewig=weibliche

Zieht uns hinan." (1211行)

これは、大詩篇の最後の句です。

「永遠に女性なるもの

我らを引きて行かしむ」

森鷗外さんの訳です。そのとおり。

「永遠に女性なるものが我らを引きて行かしむ」

どこへ行かせるかというと、その後に二句つけたのは、世界中に私だけだけれども。

"Mit Lieb' und Wonne

Zur heiligen Sonne."

これも、ちゃんと韻を踏ませた。

「愛と歓びをもって

神聖なる太陽へと」

引き上げて行くと。ゲートルは本当はこの句を書いてよかったんですけど、彼はここでもって、その先は余韻を残して言わなかったんでしょう。あの『ファウスト』の一番初めは、

"Die Sonne" 「太陽」

で始まっている。太陽で始まっているから、太陽で終わらせるのが本当なんです。ゲートルは「太陽の子」ですからね。時計の長針と短針が天空を、中天を指した時、12時に、彼は生まれた。時計がチーン、チーンと鳴っている時に生まれたので、



「自分は“Sonnenkind”（太陽の子）だ」

と。ゲーテが、もし日本の国旗がドイツの国旗だったら、ものすごく喜んだらうね。この太陽は、日本人の我々にとって、キリストじゃないですか。もの凄い光の世界。太陽なくしては、地球はありえない。絶対の存在です。キリストなくしては、我々は在り得ない。その“Some”なんだ。

「永遠に女性なるものが

我らを引き上げていく」

と、あなた方、女性は本当は、歴史を導いている人たちなんです。それだけの、隠れた力なんです、女性というのは。それだけの自覚を持ってくださいよ。

ところで、私は、母なくしては私の今日はありません。だから、私は、母の写真をいつも表側に持っている。離れたことがない。

“Das Ewig=mütterliche

Ziegt uns hinan.”

「永遠に母なるもの、永遠に母性なるものが

我らを引き上げてゆく」

「お母さん！」と、兵士が戦争に行っても、最後に叫ぶそう。

「永遠に母性なるもの

我らを引き上げてゆく」

と、ゲーテのあの言葉の一番奥には、これが隠されていたと、そんなことは誰も今まで、世界中のゲーテ研究家も言わない。私はそう思う。ということは、ゲーテのお母さんは、本当に太陽のような性格のお母さんだった。誰をも愛し、誰にも愛された。素晴らしい方。お母さんのことを非常にゲーテは思っていた。『ファウスト』の中に、“Mütterstelle”「母達の場」というのもあります。これは非常に神秘的なところです。

女性は世界の平和を本当にもたらすことの本当の力であると、それだけの誇りと使命を持っていた。話がズレましたけれども、これは大事なことから、申し上げておきました。

●しづの別れの言葉

実は、私の同期の桜のSさんが、D大学の第三回目の学長だったんだけど、こないだ突然死んでしまった。山を歩き過ぎたんだ、丈夫な人なんでね、ちよつと自分も自信があったと見えて。急性肺炎に罹って、それが悪化して仆れてしまった。

「いやあ、Sが死んだか」

と、皆がびっくりした。大学葬で、友人の総代として、私は一席やった。その時に、私は、「弔辞」とは言わなかった。



"Aufwiederschen"

「また逢う日まで」

と。ドイツ語の「さようなら」だ。

「私もそのうちに往くよ、ちよつと待ってろ」

と。そういう、弔辞ならざる弔辞を、私が語ったものだから、葬式に来ていた人たちはみんなびつくりした。そうして、この彼が、やはりお母さんの写真を自分のポケットの中にも持つていた。そのことをお互いに知った。

「そうかね、君もそうかね」

と。母が、Sを、また私を形成した基であつた。そういう意味で、

「もうすぐ往くよ。もう少し、私は仕事があるから、それが終わったら往くから。

ちよつと待ってろ」

と。そういうような、

「しばしの別れの言葉」

としたんだ。私も正直ね、この弱虫の臆病者が、もう死ぬことを何とも思っていない。だから、こないだの詩にも書いたでしょ。

「そのうちに、その頃は山の中で人知れず逝つてしまいたい。葬式も要らなければ、

お墓も要らないよ」

と。あれを書いてからね、後で私は法然のものを読んでいたら、法然が同じことを言っている。

「法然さん、どこにお墓を造りましょう」

「いや、お墓なんか要らないよ」

と。やつぱり、法然はそうだったかと思つて、大変うれしかったですね。本当に生きた、ということが徴になる。それは、あちらで本当に「往生」する。往きて生きる。「往生」は素晴らしい言葉だね。我々は、パウロが言つたように、霊体を持つて往生する。

あんなことを詩に書いてね、私は祈りの願望の世界を直ちに現実としているんです。根元の現実として見えているんです。そうしたら、ぼくの息子が、

「そうか、葬式しなくていいなら、楽でいいな」

なんて言つてる。

「そうだよ、その通りだよ」

と。ただ、あなた方は、私をもし記念してくださいるなら、知らない人たちに福音を伝えてください。それだけが、私のお願いと、また私の喜びということです。

●汝は我が有なり

「²彼は叫ばず、言^{こと}挙げせず、その声を巷^{ちまた}に聞こえしめない。」（イザヤ42・2



私訳

素晴らしいねえ。「静かに伝える」という。叫ぶ時は、叫んだらいいよ。何も決める必要はない。しかし、一番深い祈りは沈黙の祈りです。正直、そうです。床の上に坐って黙って祈っていると、もうキリストと一つとされてしまつてね、霊動が始まる。後はどうだっていいじゃないですか。そういうことで、行きましょう。

「³傷める^{いた}葦を折らず、^{あし}ほの暗き^{ろうそく}蠟燭を消さない。」（イザヤ42・3 私訳）

これは本当に、イザヤがこういうことまで書いてるかと、いうくらいですね、雄大な荘厳なことを言うかと思うと、非常にまた細かい優しいことを語っている。

大きな人物というのはそうなんです。ベートーベンの交響楽をみてごらん。ベートーベンの音楽も各種類が出ているでしょ、いろんな種類が。ゲーテもそうです。大宇宙を反映している。マクロコスモスを映しているミクロコスモスという。凝縮しているわけです。いわゆる概念的な神学なんてものは――神さまの聖意の世界を、聖書を神学化したって、そんな組織神学なんか――私はゴメンだといって、組織神学会から出てしまった。聖書は劇的なんだから、完全に。ドラマなんだ。だから、もう最後の日に向かって、我々は大希望をもつて黙示録の現実の中に進んで行く。いかなる現実に対しても、本当の処し方ができる。こういうことになるわけですね。

「^{まこと}信実を以て公義を示す。⁴彼は衰えず^{くじ}挫けないで公義を地に据えつける。津々浦々はその^{おしえ}教法を待ち望もう。」（イザヤ42・3〜4 私訳）

「おしえ」というのは、私は「教法」と書いた。法の世界だ、全部。霊法の世界。我々の魂は霊法の世界を動いていかなくては。キリストも、お釈迦さんも、この霊法の世界です。道徳法、自然法、みんな法。法にのつとつていのが、本当の自由だということを、今の人は知らない。自己に捕らわれないんだから。法にのつとつているんだから。即法する、法に即する。そうすると、それが本当に自由である。キリストが正にそう。孔子が七十にして、やつとその世界に入った。「ダルマ」、達磨さんみたい。

「ヤコブよ、汝を創造したエホバ、今こう言い給う、イスラエルよ、汝を造つ

た者今こう言い給う、」（イザヤ43・1 私訳）

「恐れるな、我は汝を贖った、我は汝の名を呼んだ、汝はわが有である。」

たたみかけて言っている。私の第十卷（『聖書は大ドラマである』1988年刊）の「8月2日」のところです。

「お前を贖うぞ」じゃないんです、

「贖ったよ。何を問題にしているか、なぜ自分を見るかと」

と、こういうことです。

「私は汝の名を呼んだ、汝はわが有である」

と。神さまの方から、キリストの方から、



「汝は我が有^{もの}なり」

と。我々は、人間は――人間ばかりではない――大自然も、そして人間が造っている国家というものの、国土、みんなこれは神の有なんだ、本当は。そこへ持っていかなければ、ダメなんですよ。

●贖ったから帰って来なさい

ソ連はソ連でいいよ。ドイツはドイツでいい。ドイツが東西一緒になって、また恐ろしいなんて、そんなこと考える必要はない。あのペレストロイカは大したもんだ。大したもんだけれども、あのゴルバチョフというのがもう一つ次元が高くなると凄^{すご}いんだけど。その点は惜しい。ということは、大政治家も、本当の「大」がつくためには、本当の宗教心を持たなければ「大」になれない。そこへいくと、グラッドストーン、リンカーン、ビスマルクなんてのは凄い、その世界に入っているから。日本の政治家はそこにいつてないじゃないですか。

私はこないだ、夢の中で集会したら、海部総理大臣がやってきたよ。海部さんがやってきて聞いて、なんか感動しているんだ。へえー、総理大臣も聞きに来たかと。本当にな思議な夢をよく見るんですよ。ということは、私は自分で言ってはおかしいけれども、今の、一つの預言をさせられているわけです。

だから、全部、神の有として、国土も。そうすれば、日本のこんなくだらない、馬鹿らしい土地問題なんてのは起きないはずなんだ。もとを言えば、全部そこから来ている。宗教心がないことから来ている。教育の制度をいくら改革したってダメだよ。教育者自身がひっくり返らなければ。望みはないです、正直。絶望の現実なんだから、本当は。けれども、その絶望においてなお私たちは絶望しない。これキリストだから。言いたいことははっきり言つてきなさいよ。もう遠慮することはない。本ものにはうたれるんです。どうぞ、皆さんも、周辺の人に本当のことを言つてください。

「来たりて見よ」

と。

「²⁵我こそは我自らの故に汝の不義を消し、汝の罪を心に留^とめない。」（イザヤ

43・25 私訳）

「お前のためじゃない。自分の故に、お前の不義を消し、罪ももう心に留めない」

と。イザヤ書というのは凄いね。パウロの言いかねているようなことをはつきり言つてしまっている。大変なやつだなあ、この第二イザヤという無名な預言者は。だから、キリストはこれを本当に受けとられたんです。全部これを身証された。身を以て証しされた。

「²¹汝はわが僕。イスラエルよ、我は汝を忘れない。²²我は汝の不義を雲の如くに消し、汝の罪を霧の如く散らした。汝われに回帰せよ、我れが汝を贖つ



「たのだから。」（イザヤ 44・21～22 私訳）

「汝われに回帰せよ。帰って来い。我れが汝を贖ったのだから」

「帰れ、帰れ」と言っているんだ。

「贖ったから、帰って来いよ」

と。「贖うから帰って来い」じゃないですよ。

「贖ったのだから、楽に帰って来なさい」

と。帰って来ざるを得ない、行かざるを得ない、来ざるを得ない。みんな「ざるを得ない」世界です。どうせ人間はみんな罪びとに過ぎませんよ。そんなもの問題にしたってしょうがないじゃないですか。それよりも積極的に、

「キリストのもとに帰って行かざるを得ない、吸い込まれて行くぞ」

と。ブラック・ホールみたいなものだ。それで進んでゆく。

天文の世界は、時々テレビで見られるけれども、凄いね。私は数学と物理ができれば、本当は天文学をやりたいくらいに思う。あなた方の中に誰か天文学をやる人はいないのか。

● 祈入により霊気は入って来る

「⁵天をつくりてこれをのべ、地とそうえの^{なりいでもの}産物とをひらき、そのうえの

民に息をあたえ、その中をあゆむものに霊をあたえたもう神エホバかく言い

給う。」（イザヤ 42・5）

「息を与え、霊を与える」と書いてあるでしょ。「息」と「霊」は、ちよつと字が違うんですけど。我々は、肉体は空気に囲まれて、空気を吸っている、無意識に。これは「気」の世界。今度は「霊気」。「霊気」を魂が吸わなければいかん。これがおるすになっているわけですね、みんな。いつも申し上げているとおり、これは、祈り入ることによって、「祈入」によって、霊気は入って来る。これはもう、自分でもって感ずるから仕方がない。

「気」「霊」「風」。「天地正大の気」という、藤田東湖のあの「気」です。

「秀でては富士の高嶺となる」

と。富士山も、あれは宇宙の、神の気、神気がこれを造ったと。

「^{そそ}濺いでは大^{だい}瀬の水となる」

水もそうだと。藤田東湖のあの詩の前半は本当に凄い。それだけの魂だった、あの藤田東湖というやつは。

病気というのは、気が病む。気が病むからおかしくなる。また、気が神につながってゆけば、肉体までも治ってくる。お医者さんが、もしこの気の世界を知らなかったら、本当のお医者さんではないわけだ。



●有りて在らしめる者

「⁶云く、われエホバ義をもてなんじを召したり。われなんじの手をとり汝をまもり、なんじを民の契約とし、異邦人のひかりとなし。」（イザヤ42・6）

この「義をもて」というのは、本当は、

「義へと召す」

という訳し方が本当なんです。神の聖意は全部、義である。と同時に、その聖意が現象していくところは全部、愛である。義と愛とは離すことができない。この義は裁かない。この義は与えるから、愛になつてしまう。

あのデカルトが、

「我れ思う故に我れ在り」

と言った。哲学の世界では、ある意味においては、それは真理だろう。けれども、「我れ思う」じゃない。

「我は思わせられる」

上から。上から考えがやってくる。それで「我れは在り」という、それなら、それが本当の世界です。これは宗教の世界。

しかし、「思わせられる」だけじゃダメなんだよ、本当は。「在る」ということが、同時に「動」に転換していかなければ。いや、実に、「信ずる」こと自身が「行」だと、いつも言っているでしょ。信行の行だと。全存在的にキリストに自分を投げ込むことが信だから、その投げ込みが行なんだから。禅宗では、非常に行のことをやりますね、聖道門だから。けれども、その力はどこから来るのか。禅宗でも、やつぱり「如来」を考えざるを得ないでしょ。

「⁷而して瞽^{めしい}の目を開き、俘囚^{とらわれびと}を獄よりいだし暗^{くらき}にすめるものを檻^{おり}のうちよ

り出ださしめん。」（イザヤ42・7）

みんなこれは、キリストがなさったじゃないですか。

「われはエホバなり。是わが名なり」（イザヤ42・8）

「有りて在らしめる者である」

と。太陽の如く、「在る」事が「在らしめる」者である。神さまによって、信ずると信じないとかかわらず、駄々っ子まで、みんな在らしめられている。それに気がつかないで、傲慢なことばかりやっている。いつまでもそんなことをやっている自分自身が自分を滅ぼすだけのはなし。神さまは裁こうとしなくても、審判を自分でやっているんだよ、情けないもんだ、人間という奴は。

「世界の歴史は世界審判史なり」

という。その通り。自分で審判を招いている。



●良寛さん

こないだ、ある友人がドライブしてくれて、私を良寛さんの故里に連れていってくれた。出雲崎の向こう側に佐渡がある。お母さんは佐渡の相川の人。私の父のと同じ所だ。これもやっぱりお母さんを非常に慕って、自分が死んだら墓は佐渡の方に向けてくれと。この良寛さんの記念館に私は訪ねていって、やはり非常に感じましたので、少しお話しします。良寛は、生まれは非常に順当な生活のできた裕福なひとなんです。だけれども、彼はだんだん後から、禅宗の方に入ってから、修行するわけですけども。やっぱり素晴らしき先生がいたんだ、国仙和尚というのが。良寛が傾倒してやまなかつた師の国仙和尚は良寛をよく理解していた。

「良や異なるが如く、道みち転う寛た」

と。「良や」というのは、お前、良寛よ。馬鹿のようだけれども。「転う」という言葉はちよつと訳しにくいですけどもね、私たちは昔から時々使った言葉ですけども。「実際、やっぱり」なんていう意味です。

「道はやっぱり寛ひろいんだよ、狭いのではないよ」

と。非常に広大な、寛大な道である。そして、

「聖を越え、賢を越える」

これが「道転寛」の意味なんです。

「賢愚だとか聖濁だとか、そういうことを言っている世界をもう一つ越えてしまえ」

と。それは絶対の世界です。それが本当に人を、本当にその広い世界は、全部包摂してしまふというわけです。

良寛もそうだし、白隠さんもそうだ。そういう魂だ。仏教的な世界の、ある不思議なよさというもの。それは福音の世界、いわゆる西洋を通ってきた福音の世界には滅多にない。そういうものを、全部私たちは本当は、キリストの――また、イザヤ書は持っているよ――そういう広さでもって全部包括することを今度は語りたい。今日はその前段みたいなことを言いだしたけれども。

「良寛さんは素晴らしい」

といって、ただ讃めるのではない。讃めたつてしょうがない。

「良寛であろうが、白隠であろうが、道元であろうが、日蓮であろうが、それは私の中で自由に展開できるぞ」

というところを、このキリストの福音は持っている。だから凄い。本当の意味で東西を融合することができるのは、キリストを有つ人です。「エン・クリスト」なんです。キリストがそれだけ凄いということ。もう、概念を越えた世界です。

そうしたらば、仏教の方でも、「ああ、こんなにちわ」と楽にお話ができる。

「ああ、そうです。そちらの、本もので結構です」



と。「キリスト教になれ」なんて言う必要は一つもない。けれども、全部、包んじやう。ちようど空気がみたいなもの。宇宙の空気うちみたいなもの。

「神気うち表に満ちて秀発する」

という言葉があるな。神の気がうちに満ちて爆発するようなこと。そういうことが、この良寛さんの世界ですね。『良寛禅師奇話』という本の中に書いてある。

「神気表に満ちて秀発す。その形容、深仙の如し。その眼は鳳眼」

良寛はまるで仙人みたいだ、その眼は鳳凰鳥の眼みたいだと、凄いことが書いてあるな。ところが、

「常に黙々として閑雅にして余りあるが如し」

つかみどころがないんだ。良寛の歌を少しご紹介いたしましょう。

「くりやべは今宵も乏し一つなる林檎をさきて君と分かつたん」

台所は今晚も乏しい。りんごが一つしかない。これを分けて食べようじゃないかと。これは、アッシジのフランシスじゃないけれども、清貧に甘んじていた。何かひとがくれても、余分だと返してしまう。

「これだけでたくさんです、あとは要りません」

と。決して先のことを考えない、計算しない。

「子供らと手毬てまりつきつきこの里に遊ぶはるひ春日は暮れずともよし」

楽しいから春の日は暮れなくてよろしい、なんてね、非常にゆったりしたところがある。

「風は清し月はさやけしいぎ共に踊りあかさん老いのなごりに」

「もう私もそろそろ向こう側に行くんだが、風は清く月はさやかだから、さあ一緒に踊りあかそうじゃないか」

と。なかなか、そういった面白い気持ちをもった人だった。しかし、良寛の魂それ自身は深い寂しさを持っていました。それは結局、自分を本当に解する人がいないから。けれども、彼はすり鉢一つ。それで御飯を炊いたり、顔を洗ったり、手を洗ったり足を拭いたり。なにしろ、すり鉢一つで、他は何もない。

「盗人に取り残されし窓の月」

夜具も一つ。泥棒が来て持って行ってしまった。

「ああいいよ、持っていていい。だけれども、窓にかかっているお月さまは持っていないかったね」

なんて。まあ、そんな真似は我々にはできません。けれども、そういった本当に、

「無一物無尽蔵」

の境地、それは、福音を持っている我々は、

「あれども無きが如く、無けれども有るが如し」

とパウロが言ったが、その通り。全部、即ち、私しないわけです。全部、預かりものだ。私」



が無い、「無私」なんだ。これが全部、賜りたる現実です。相対的な私は有るよ。そんなものは、問題にして何になるか。そんなものはどうだっていい。キリストという無私の世界に入っていけば、極楽なんだ、天国なんだ。何とも言えない楽しさの世界ですね。

四十歳ばかり若い尼さん、貞信尼と歌を交換した。この人にはもう終わり頃には少し世話になったですね、動けなくなつてから。

「またも来よ柴の庵を厭わずすき尾花の露をわけわけ」

またやって来なさいよと。非常に人間的なところがあるんだ。

「月やみの光を待ちて帰りみませ君が家路は遠からなくに」

そう遠くもないから、月が出て来たら、そうしたら帰りなさいよと。非常に人間味のある人だよ。それで、一番良寛らしい、また我々としても一番大事な句は、最期の辞世の句です。

「形見とて何か残さん春は花山時ほととぎす鳥秋はもみぢ葉」

素晴らしいねえ。私はとてもこの句は好きだね。形見といったって何もないぞ、春は花と山ほとどきすと秋はもみぢ葉、それが私の形見だ、私の姿だと。大自然と溶け合っている。

● 毎日が一対一の集会

ゲートルが言っていました、

「自然と親しまないで、自然を勝手に利用していると今に困る時が来るぞ」

と。その通り、今の20世紀の終わりは、ゲートルの予言の通りです。大自然をおかしなことにしてしまっているでしょ。空中のオゾンがおかしくなつて、今度は、そうしたら我々は皮膚病に罹る。とにかく、神を抜きにしてしまうと、人間というものはこういうおかしいことになる。20世紀の人類が、世界が、マイナスの証明をやりつつある。原子核の文明なんてものは危なくてしょうがない。核の脅威だからね、今は。核実験をやれば、それだけ全部汚染していきますから。世界の政治家が寄り集まって会議なんかしたって、何も本当のことを言つてやしない。旧約の預言書を読めばいい、

「立ち帰れ、立ち帰れ」

と言っている。あなた方が本当の政治家なんだよ。政治とは何ぞや、ということの一番根底のことは、福音を知っている人が言えるわけなんだ。海部総理を知っていたら、誰かものを言つてやりなさいよ。私の第十卷（『聖書は大ドラマである』1988年刊）を読ませたいくらいだ。

そんなことでね、本当にこれはもう、ただ集会していることじゃないんです、我々は。毎日が、あなた方が一対一の集会をしていらつしやらないと。

「この人を救つてやれ。こういう世界があるぞ」

と。そういう一対一の伝道ならざる伝道をね――これは本当の伝道なんだ――ぜひやってくださいよ。そして、人が、



「いやあ、そうかあ」

と言って、段々のみこめてくることくらいうれしいことはない、本当に。遠慮することはないですよ、本当のことは必ず響きますから。水を割ることはない。

●グノーという作曲家

グノーという作曲家がいますね。音楽家。あのお父さんは絵描きだったそうだな。お母さんはピアノを弾くひと。

やはり、優れた人たちのお母さんは大体みんな素晴らしいね、魂が。だから、さっき言った、「永遠に女性なるもの我々を引き上げ」

というが、女性が歴史を本当は導いているんですよ。それだけの存在であることを自覚してくださいよね。

やはり、グノーは幼年時代から相当普通とは違っていた。子犬が鳴いたそうだ。そうしたら、今の子犬は、ドレミファソのソの音でもって叫んでいたねと。鳥が鳴いていたら、あの鳥はドの音で鳴いているよと。みんな音楽になおしてしまった。それで、お母さんはびっくりしてしまった。だけれども、父は、どこまでも、芸術家にしなくなかった。ところが、校長先生が、どうもこの子は少し普通のと違うなと、一つ私に作曲してくれと。

「グノー君、君は音楽が好きなのだが、何か曲を一つ作ってみないか。この詩を見て、この詩につりあうような歌を作ってくれ」

と。そうしたら、即日、グノーは作曲してしまった。

「校長先生、できました」

「何ができたか」

「あの詩の曲ですよ」

「そんなに早くできたかね」

と校長はそれを聞いてびっくりした。それが、例の『アベマリア』です。その時には、もうお母さんはいないんですけれども、死ぬ時に、

「お前は、人のために何かするようないことをしなさい、人の為に生きなさいよ」

と言った。それが、音楽の世界で本当に人の為に生きるようになった。そして、有名な『ファウスト』というオペラを作ったでしょ。大変なもんだ、これは。1859年にできた。これが320回続けて上演されたそうだね。

●夏期福音特別集会は35回で止めた

あなた方は、またあなた方のお子さんたちは、みんな天下一品です。絶対に、他人をうらやむこともないし、それぞれ必ず何か大事なものを持っている。さっきも、登校拒否の大分ひどい者たちのことを嘆いておられたけれども。本当に今、親がしょうがないんだね。



親が神さまに帰らないと。けれども、今はどんなに受けとらなくても、言うべきことははっきり言っておくと、そのうちに、そいつが行き詰まった時に、

「ああ、あの先生はあんな事を言っただけでも、あれはやっぱり本当だった」

と、立ち帰ることがあるでしょう。その時に効果が現れようが、現れまいが、構やしない。言うことははっきり言っておく。何も、大学ばかり出なくてもいいんだよ。日本じゃ、「大学卒」と、そんなことばかり考えている。レットル大学生が多くてしょうがない。もう今、本当のことが、本当に少なくなつた。あなた方は本ものの世界に入つたんだから、よどんでいたら、もつたいないですよ。どしどし発展していかなければ、言葉で行動で。

まあ、来年からは多分こういう集会（夏季福音特別集会）はなさらないでしょう。それは、あなた方が夏、

「そういう一対一の伝道をするために、この集会を止めるんだ」

と、我々は考えていいわけじゃないですか。私は35回で止めたんだけど。今度は、O先生が自由になつたから、O先生がこれからどうなさるか、そういうことは何も私は制限するわけでも何でもない。

とにかく、キリストに在つては間違ひはない。キリストに在つては、本当の自由の世界が天的必然であつて、天的必然が本当の自由である。あなた方は、

「いやあ、やつぱり楽しくてしょうがない」

と。楽しみが伴わないのは本ものではないんだよ。楽しみを求めてはダメなんだ、おのずから伴う世界なんです。所謂エ・ピクリアンともちよつと違う。

イザヤ書で預言しているところの、明日はその53章の凄いところに行きますけれども、42、49、50、53章の、エホバの僕^{しもべ}。私たちは、キリストの僕。キリストはエホバの僕。僕が本当の自由であるということを叫んだのが、マルチン・ルターの『クリスチャンの自由』という本です。私は、このエホバの力が来るから、キリストの力が来るから、人を助けることができる。これが愛ということ。人助けということ。人助けをせざるを得ない。

日曜の晩は、「翔ぶが如く」という、明治維新の、特に西郷南洲を中心にした劇をやつてあるね。凄いね、あれ。ああいうような人物、第一級の人物はみな仆れた。天下をとつたのは、第二級の奴らだ。山形有朋なんて大したことないんだ。佐久間象山、吉田松陰、坂本龍馬、西郷南洲、みんな仆れた。あの中に出てくる台詞には、凄いせりふがあるね、その通りだよ。ああいう人物が今は本当にいなくなつて、情けないよ。クリスチャンがその人物でありうるんです。それ以上でありうるんです。

しかし、福音はなかなか伝わらない。いいですよ、伝わらなくても。やるだけのことをやつておけば。新興宗教の大衆向きと違うんだから、この福音の世界は。そのかわり、これは世界の歴史を本当は動かしているだから。どん底で支えているんだ。

